

秦代の「数術」簡牘文献における 私邸庭園及びその性格

— 『作庭記』の造園禁忌との比較を兼ねて—

劉 海 宇^{※1}

はじめに

中国古代の庭園を分類する場合、一般的には皇帝直属の大規模な皇家苑囿と貴族・富豪の私邸庭園とに大別される¹⁾。『史記』秦始皇本紀によれば、秦の始皇帝は戦国諸侯を滅ぼすたびに、その宮室を模して首都咸陽の北の山麓に宮殿を建てたという。天下を統一すると、さらに渭水を中心に、離宮別館・苑囿台池を造営し、中でも蘭池宮・上林苑・阿房宮等は現在においても有名である²⁾。ところで、始皇帝の贅を尽くして造営した苑囿に対して、秦代の官僚や富豪の私邸庭園については、將軍王翦の「美しき田宅園池を請ふこと甚だ衆し^{はなは おほ}」を除けば、史書にほとんど記録を確認できない。いわんや秦代の庶民の私邸庭園においておやである。もとより資料の制限により、従来の研究では秦代の宮廷苑囿に関する議論は多く見えるが、秦代の私邸園池については研究が少ないのが現状である。

幸いにも、近年、中国各地から秦代の簡牘資料が相次いで出土しており、秦代の研究ではこれらの簡牘の利用なくして進展は考えられないと言えよう。秦代の簡牘資料では、「数術」と分類される一群がある。「数術」とは、『漢書』芸文志では「太史令の尹咸をして数術を校せしむ」の顔師古注に「占卜の書なり」とか、「凡そ数術百九十家、二千五百二十八卷。数術は、みな明堂・羲和・史卜の職なり」とあるように、古代の天文・暦法・占卜等に関する学問のことである。「数術」の書籍には天文・暦譜・五行・蓍龜・雜占・刑法の分野が含まれており、出土した「数術」簡牘にもこうしたすべての分野が包括されている³⁾。それでは、秦代の「数術」簡牘文献に官僚や庶民の私邸園池に関する資料があるのだろうか。

本稿では、出土した秦代の「数術」簡牘に見える池を中心とする私邸庭園について、関係資料を収集・分析することによって、秦代の私邸庭園の地割や池の性格を明らかにし、あわせて成立年代が平安時代末期とされる東アジアの最古の造園書『作庭記』における造園の禁忌思想と比較してみたい。

※ 岩手大学平泉文化研究センター

1) 田中淡「中国造園史における初期的風格と江南庭園遺構」、『東方学報』第62冊、127頁。

3) 劉楽賢『簡帛数術文献探論』、湖北教育出版社2003年、14～51頁。

2) 司馬遷『史記』、中華書局1959年、240頁。

一 睡虎地『日書』における苑池

「日書」とは、主として時日や時刻の吉凶の占いを中心に、種々の占卜・祈祷のために書かれた文書のことである。中国古代の「数術」の重要な分野である「日書」の命名は睡虎地秦墓から出土した『日書』乙種竹簡の篇題によるものである⁴⁾。それ以後、全中国の各地から戦国時代から漢代までの「日書」が数多く出土している。たとえば、睡虎地秦墓から『日書』甲種と乙種が検出され、『日書』甲種に宅相学と関係ある内容が存在する。だが、これを論議する前に、まず簡牘を埋葬した墓地の概況及び被葬者の身分を説明する必要がある。

1975年、湖北省雲夢県睡虎地で戦国末期から秦代にかけての墳墓十数基が発掘された。その中の十一号墓から千枚以上もの竹簡及び七十点余りの青銅器・漆器・陶器等が出土した。竹簡の内容には『編年記』・『日書』甲種・『日書』乙種等十種類がある。発掘者によれば、『編年記』に現れた「喜」が被葬者である可能性が高く、始皇帝三十（BC217）年に死亡したということである。『編年記』の記載を見ると、被葬者とされる「喜」という人物は、相次いで安陸御史・安陸令史・鄢令史等を歴任した下級官僚である。

睡虎地『日書』甲種の宅相内容に園池と関連する資料がある。整理報告者はこれが『漢書』芸文志の『宮宅地形』二十卷、及び『隋書』経籍志の『宅吉凶論』・『相宅図』の類の書籍と近いと指摘している⁵⁾。この『日書』資料をもとにして、秦代の下級官僚である中産階級の私邸庭園を検討することが可能になると考えられる。まず、睡虎地『日書』甲種に見える園池を次に示す（図1）。

為沱（池）西南、富／為沱（池）正北、不利其母／水瀆（瀆）西出、貧、有女子言／水瀆（瀆）北出、母（無）臧（藏）貨／水瀆（瀆）南出、利家／（池を為るに西南なるは、富なり。池を為るに正北なるは、其の母に利あらず。水瀆を西に出だせば、貧にして、女子の言有り。水瀆を北に出だせば、藏貨無し。水瀆を南に出だせば、家に利あり。）⁶⁾

報告では「瀆」字を「寶」の仮借文字とするが、その見解には問題がある。すなわち同じ睡虎地竹簡『為

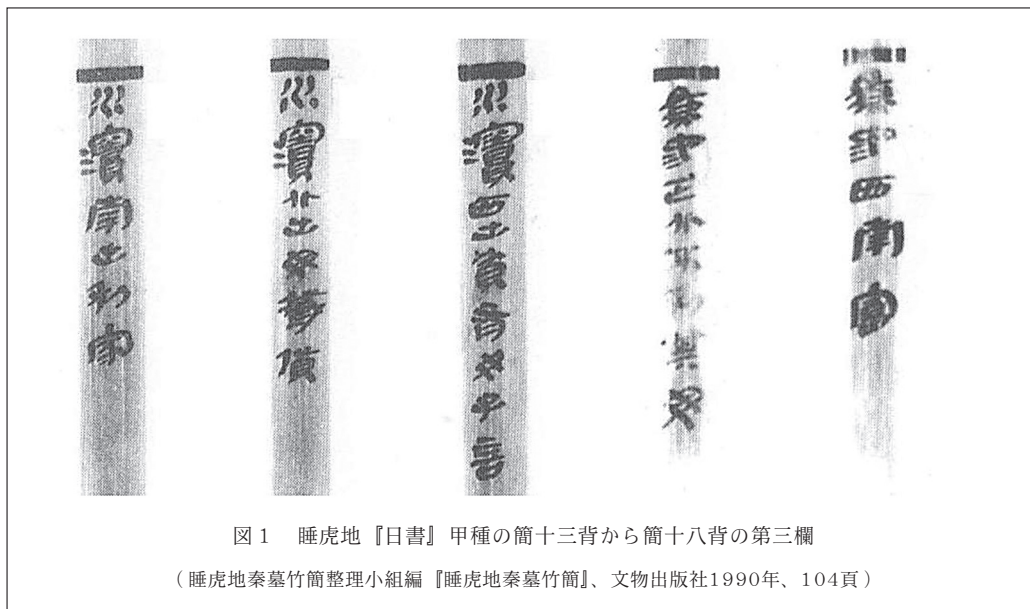


図1 睡虎地『日書』甲種の簡十三背から簡十八背の第三欄
（睡虎地秦墓竹簡整理小組編『睡虎地秦墓竹簡』、文物出版社1990年、104頁）

4) 工藤元男著『睡虎地秦簡よりみた秦代の国家と社会』第四章（創文社1998年、119-163頁）を参照。

5) 睡虎地秦墓竹簡整理小組編『睡虎地秦墓竹簡』、文物出版

社1990年、積文210～211頁、図版104頁。

6) 引用文中の（ ）は仮借字・異体字の読み替えを、[]は残缺部分や脱字を補うことを、<>は衍字を示す。

吏之道』三十二号簡に「稟斬瀆」とあり、その「瀆」字について、報告では「瀆」の仮借文字としている。後漢の許慎は『説文解字』で、「竇」字を「空なり。穴に従い、瀆の省声」と云い、穴の意味としているが、「瀆」字を「溝なり。水に従い、賣の声。一に曰く、邑の中の溝なり」と云い、水渠の意味としている⁷⁾。隋州孔家坡漢墓『日書』叢辰篇の「溝竇」と穿地篇の「竇溝」の「竇」字も「瀆」の仮借文字であるとされている⁸⁾。後漢前期の「新富里刻石」にも、「建武廿二（46）年十月、瀆を新富里に作る」とある⁹⁾。したがって、この睡虎地『日書』甲種の「瀆」字も「瀆」と読むべきであろう。劉樂賢氏はこの「水瀆」を「水瀆」と読んでもよいしながらも、しかし最後の解釈にまた「水穴」説を取った¹⁰⁾。ここの「水瀆」がおそらく水渠のことで、「水瀆西出」が西へ流れる水渠を造ることであろう。そうすると、この一文の意味は次ぎのように解される。

もし池を庭の西南に開鑿すれば、その家が豊かになる。池を庭の真北に開鑿すれば、家主の母に差し障りがある。水渠を池の西に作れば、その家が貧しくなり、女子による讒言がある。水渠を北に作れば、財宝がなくなる。水渠を南に作れば、家に利がある。

換言すれば、池を庭の西南に、水渠を池の南に作るのが吉であるということである。このような水渠の方向が運氣に影響する思想は、後世の宅相学の書籍にも受け継がれている。たとえば、敦煌文献 P3865 『宅経』に「宅に五虚の人をして貧耗ひんこうならしめ、五実の人をして富貴ならしむること有り。（中略）宅中に水 東南へ流ること五つの実なり」とあるように¹¹⁾、それぞれ五つのことで家を貧困にさせる「虚」、或いは家を富貴にさせる「実」とに分かれ、その中に東南に流れる水渠を作ることが家を富貴にさせる五番目の「実」とされているものである（図2）。

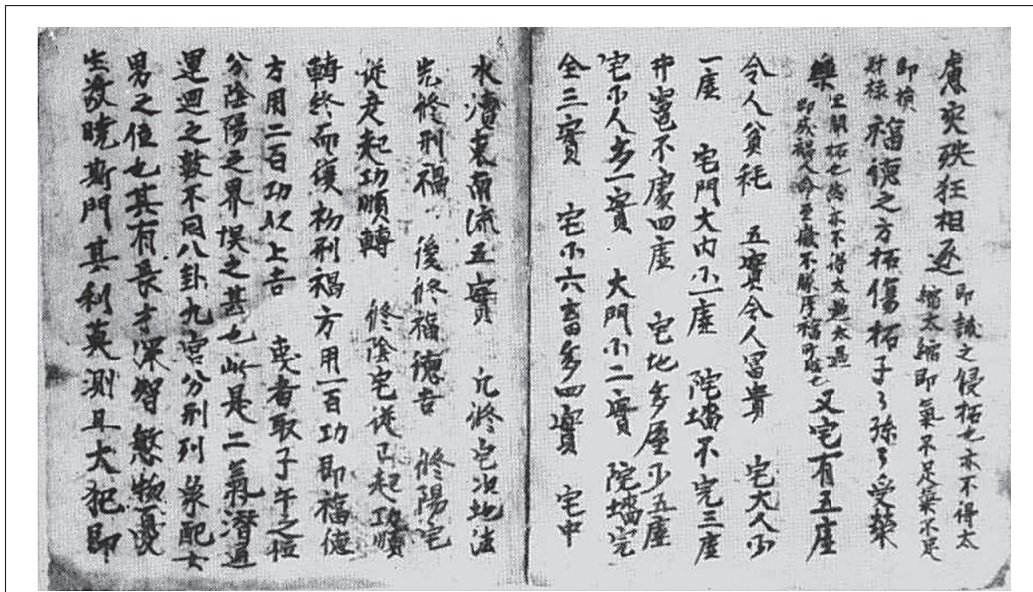


図2 敦煌文献 P3865 『宅経』の一部

(黄永武博士主編『敦煌宝蔵』131冊、台湾新文豊出版公司1986年、349頁)

7) 許慎『説文解字』、中華書局1963年、152頁、232頁。

8) 白於藍編著『戦国秦漢簡帛古書通假字彙纂』、福建人民出版社2012年、414頁。

9) 孟繼新『山東曲阜市出土漢代建武石刻』、『考古』1996年10期、94頁。

10) 劉樂賢著『睡虎地日書研究』、台湾文津出版社1994年、220～223頁。

11) 黄永武博士主編『敦煌宝蔵』131冊、台湾新文豊出版公司1986年、349頁。「宅有五虚令人貧耗（耗），五實令人富貴。宅大人少，一虚；宅門大内小，一虚；<院>牆不完，三虚；井窻不處，四虚；宅地多屋少，五虚。宅小人多，一實；大門小，二實；院墻完全，三實；宅小六畜多，四實；宅中水瀆東南流，五實。」

睡虎地『日書』甲種の宅相文書には前述した池のほかに、「宇（邸宅全体か家屋）」の「邦（都市）」での位置やその地形に関する吉凶¹²⁾、「圈（豚以外の家畜を飼う小屋）」¹³⁾・「困（円形の穀倉）」¹⁴⁾・「井」¹⁵⁾・「圜（豚舎）」¹⁶⁾・「屏（厠）」¹⁷⁾の庭での方角に関する吉凶、「門」の方位や大小に関する吉凶¹⁸⁾等が記されている。林劍名氏等の研究によれば、秦代の民間の私邸庭園は漢代のそれと大差がないとのことである¹⁹⁾。漢代の墓葬から数多くの家型明器が出土しており、漢代の画像石からも私邸園池の画像が確認されている。そのため、「日書」の記載と照合し、秦代の私邸庭園の構造及びその配置について、ある程度具体像をうかがうことができる。したがって、漢代の家型明器や池の存在する画像石に見える私邸庭園を取り上げて検討する必要がある。

はじめに漢代の家型明器を検討してみる。明器とは、『礼記』檀弓篇に「夫れ明器は鬼器なり」とあるように、死者のために作成した非実用的な副葬品のことである。その中に、器物・人物・鳥獸・建築等の種類が含まれる。張勇氏の研究によれば、前漢中期から明器としての礼器が減り、日用品が増えることにともない、瓦制の家屋・井戸・倉庫・かまど等が現れてくるということである²⁰⁾。家の形を象った家型明器の中には、楼閣・倉庫・豚舎・井戸等が散在的に現れる例が多い。もっとも、いくつかのものが組み合わされた庭付きの邸宅形のものも出土している。たとえば、洛陽市張茅から出土した家型明器「緑釉陶院落」は庭付きの邸宅の形である。この家型明器の平面は長方形を呈しており、高さ23.5、長さ45、幅37cmで、後漢時代の早期か中期のものと考えられている²¹⁾。中国古代

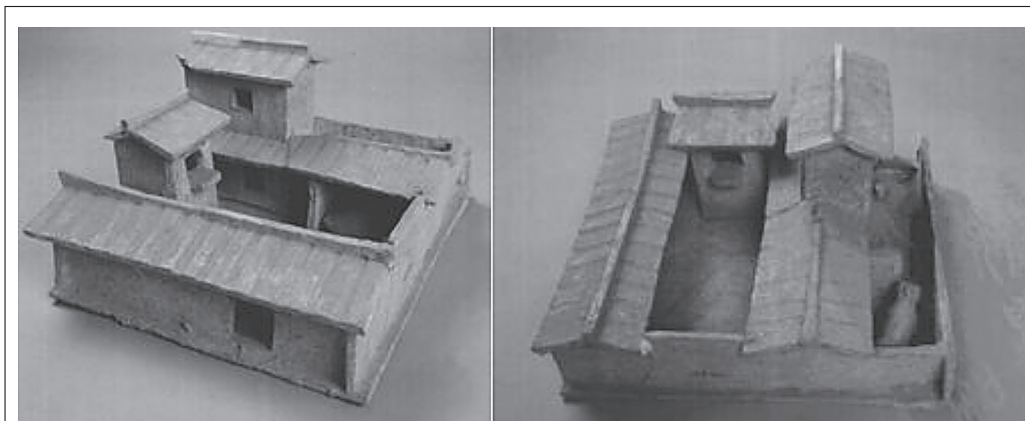
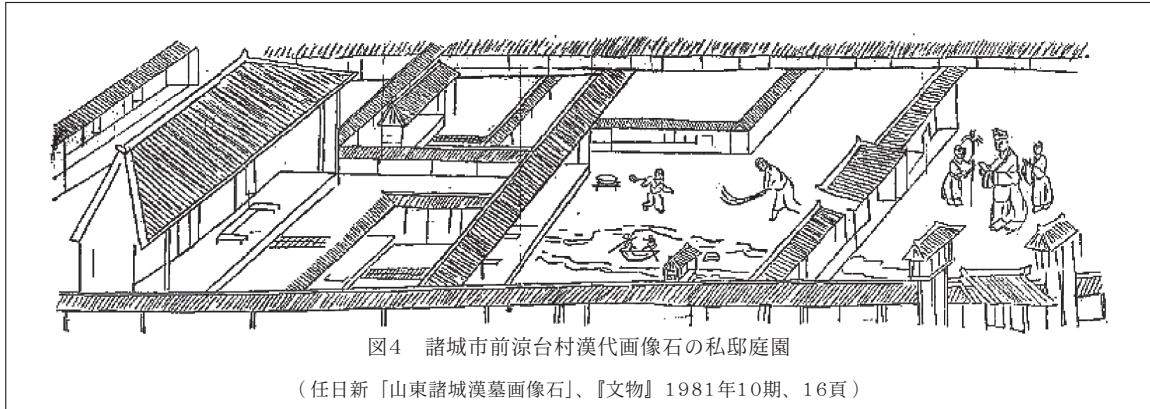


図3 洛陽市張茅の「緑釉陶院落（正面と側面）」

（河南博物院編著『河南出土漢代建築明器』、大象出版社2002年、図版二八）

- 12) 凡宇最邦之高，貴貧。宇最邦之下，富而寵。宇四旁高，中央下，富。宇四旁下，中央高，貧。宇北方高，南方下，毋（無）寵。宇南方高，北方下，利賈市。宇東方高，西方下，女子為正。宇有要（腰），不窮必刑。宇中有谷，不吉。宇右長左短，吉。宇左長，女子為正。宇多於西南之西，富。宇多於西北之北，絕後。宇多於東北之北，安。宇多於東北，出逐。宇多於東南，富，女子為正。道周環宇，不吉。祠木臨宇，不吉。垣東方高西方之垣，君子不得志。
- 13) 圈居宇西南，貴吉。圈居宇正北，富。圈居宇正東方，敗。圈居宇東南，有寵，不終世。圈居宇西北，宜子與。
- 14) 困居宇西北陋，不利。困居宇東南陋，不盈，不利室。困居宇西南陋，吉。困居宇東北陋，吉。
- 15) 井當戶牖間，富。井居西南陋，其君不癯必窮。井居西北陋，必絕後。廡居東方，鄉（向）井，日出炙其。韓，其後必肉食。
- 16) 圜居西北陋，利豬，不利人。圜居正北，吉。圜居東北，妻善病。圜居南，宜犬，多惡言。
- 17) 屏居屋後，吉。屏居宇前，不吉。
- 18) 門欲當宇階，吉。門出衝，不吉。小宮大門，貧。大宮小門，女子喜宮斷（門）。入里門之右，不吉。
- 19) 林劍鳴等『秦漢社会文明』、西北大学出版社1985年、229頁。
- 20) 張勇『建築明器起源及相關問題討論』、河南博物院編著『河南出土漢代建築明器』、大象出版社2002年、269～278頁。
- 21) 河南博物院編著『河南出土漢代建築明器』、大象出版社2002年、図版二八47頁・解釈170頁。



の建築が南向きとなる原則をもとに、この明器の建築配置を確かめよう。一番南に東西棟の平屋建物が有り、その東寄りに長方形の門が設けられている。庭に入ると、西に2階建ての倉庫が建ち、東は垣に囲まれる。2階建ての主屋は倉庫の北側に位置し、その東の平屋の碓小屋と連なる。主屋と碓小屋の北側には東・北・西の三面を塼で囲った豚舎が設けられており、その中に豚一頭が飼育されている(図3)。それでは、睡虎地『日書』甲種の宅相思想でこの明器の建築配置を解釈することができるだろうか。南に一系列の平屋があるのが、「宇は西南の西に多ければ、富なり」、及び「宇は東南に多ければ、富なり」と関係あるのかもしれない。2階建ての倉庫が庭の西に立つのが、「囷は宇の西南の陋に居れば、吉なり」によって解釈できる。豚舎が主屋の北に位置するのは、「圈は宇の正北に居れば、富なり」、及び「囷は正北に居れば、吉なり」のとおりであろう。一方、このような家型明器が必ずしも当時の私邸建築をそのまま模しているとは言えない側面もある。なぜならば、工芸的・簡略的な表現が加わっているにしても、一般の邸宅に欠かせない井戸や存在する可能性のある池がこの「緑釉陶院落」には見られないからである。

次に、漢代の画像石に見られる私邸庭園を検討してみよう。漢代画像石とは、漢代の墓葬や祠堂等の建築に使われた画像を彫った石材のことである。漢代の画像石に私邸庭園の画像がある。たとえば、山東省諸城市前涼台村から線刻で私邸園池の画像が施された後漢時代晩期の画像石が出土している(図4)。発掘者は庭園が前・中・後の三つの中庭からなり、一番前の庭にいる三人が謁見者であるとしている²²⁾。しかし、『山東画像石全集』では庭園が四つの中庭からなり、第一の中庭に笏を持つ侍者が笏を持つ二人の賓客を恭しく出迎えているとされる²³⁾。中間の中庭の西南部に水池が描かれており、進水路が後の中庭の主屋の下を通るらしく、排水路が前の中庭の西側を通り、南へ流れている。少し細長い形を呈する池の水面に二人の乗る小船が浮かべられている。この画像において、池が庭の西南部に位置しており、排水溝が南へ流れるという配置は睡虎地『日書』甲種の宅相思想と一致している。

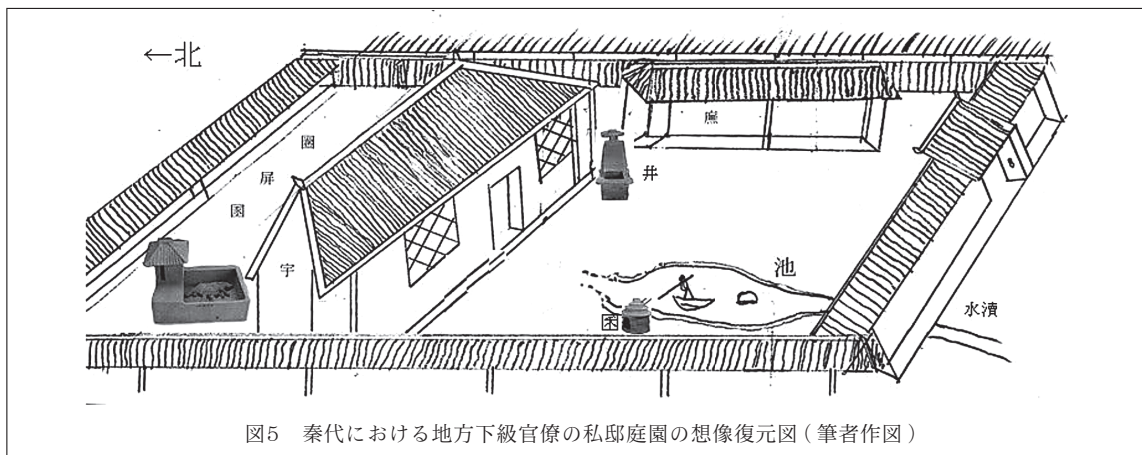
また、秦代の民居の家屋や垣の屋根が瓦葺であることが出土文献によって明らかにされている。たとえば、睡虎地秦簡『封診式』に「士伍」の住所をいう時に、「一字二内にして、おのおの戸有り、内室みな瓦に蓋はる」とか²⁴⁾、周家台三〇号秦墓竹簡に「垣に瓦有るを見る」とある²⁵⁾。以上より、

22) 任日新「山東諸城漢墓画像石」、『文物』1981年10期、14～21頁。

23) 中国画像石全集編輯委員会編『中国画像石全集1・山東漢画像石』、山東美術出版社2000年、図版一二七、92頁、図版説明42頁。

24) 睡虎地秦墓竹簡整理小組編『睡虎地秦墓竹簡』、文物出版社1990年、149頁

25) 湖北省荊州市周梁玉橋遺址博物館編『閔沮秦漢墓簡牘』、中華書局2001年、129頁。



睡虎地『日書』甲種の宅相思想に基づいて、漢代の家型明器や画像石の私邸園池の図像を参考にしながら、秦代の下級官僚や地方有力者の私邸園池の想像図を次のように復元してみた(図5)。まず、「宇(主屋)」を庭の北寄りに入れることにした。次に、秦代『日書』の「圜、正北に居れば、吉なり」とか、「圜、宇の正北に居れば、富なり」とか、「屏、屋の後に居れば、吉なり」などを根拠にして、「圜(豚舎)・「屏(厠)・「圜(豚以外の家畜を飼う小屋)」を「宇」の真北に描いた。それから、井戸が「戸牖の間に当れば、富なり」とか、また出土した井戸の模型に書かれた文字「東井」とあることから²⁶⁾、井戸を庭の東に配置した。さらに、「囷、宇の西南の陋に居れば、吉なり」というように、「囷(円形の穀倉)」を西南寄りに、「廡(ひさし)」を東に配した。最後に、池を庭の西南部に、「水瀆(排水溝)」を池の南に描いてみた。睡虎地『日書』甲種に池の水源についての記述がないため、不明であるが、自然の水源がなければ、井戸からの水が水源となることも考えられる。そのため、導水路を点線で記している。そして、復元図の中で「圜」・「囷」・「井」をそれぞれ『河南出土漢代建築明器』の図六二・図二一・図八二で表現してみた。

二 周家台秦簡における池の性格

湖北省荊州市郊外の周家台村付近で1992年から1993年にかけて秦漢時代の墓地が発掘され、その三〇号秦墓から竹簡及び木牘が合わせて400枚近く検出された。その中の『曆譜』等の文字資料によれば、三〇号墓の被葬者の死亡時期は秦二世元(BC209)年十二月下旬の可能性が指摘されている。発掘者は簡牘や副葬品等の資料に基づき、被葬者の身分を睡虎地十一号墓の被葬者「喜」の令史より少し身分の低い「佐史」のような南郡の属吏であろうと推測した²⁷⁾。言い換えれば、周家台三〇号秦墓の被葬者は睡虎地十一号墓の被葬者「喜」と身分の近い地方政府の下級官僚であることになる。

この秦墓の丙組竹簡「病方及其他」は73枚からなり、病方・祝由術・吉凶占卜等の内容が含まれる。祝由術とは、中国古代医学の分野で神秘的なものを唱えて病気の治療を行う道家呪術のことである。祝由術は歴史上、「禁呪」あるいは「呪禁」とも呼ばれ、呪術的な原始精神療法に基づいた病気の治療法だといわれる。加納喜光氏の研究によれば、伝世文献で「祝由」の語がはじめて見えるのは『黄帝内経』であるのに対して、呪術的な療法は前漢時代の馬王堆帛書『五十二病方』に見えてい

26) 注(20)前掲書、河南博物院編著『河南出土漢代建築明器』、図版七七100頁。

27) 湖北省荊州市周梁玉橋遺址博物館編「周家台三〇号秦墓発掘報告」、『閩沮秦漢墓簡牘』、145~160頁。

るという²⁸⁾。しかし、それよりもっと古い秦代の簡牘文献である周家台三〇号秦墓338と339号簡のなかに「曲池」の神に呪って腫癰の治療を行う「祝由術」のような療法がすでにある（図6）。

操杯米之沱（池）、東郷（向）、禹〔歩三〕歩、投米、祝曰：「皋！敢告／曲沱（池）、某痲（癰）（某）波（破）。禹歩擯（瀆）房（芳）棊（禄）、令某痲（癰）数（速）去。」（杯米を操り池に之き、東に向かふ。禹歩すること三步、米を投げ、祝して曰く：「皋！敢えて曲池に告ぐ。某の癰は破れ。禹歩し芳禄を瀆くは、某の癰をして速やかに去らしめよ」と。）発掘者は、「波」は「破」の仮借文字、「数」は「速」の仮借文字であるとしている²⁹⁾。王貴元氏の研究によると、「擯」は「瀆」字の同音仮借として撒く意味、「房棊」は「芳禄」と読み替えるべく祝詞で神へ献上する食糧の固有名称であるという³⁰⁾。「禹歩」とは道家儀礼のひとつとして、伝説の帝王である禹の歩き方をかたどり、避邪の力を有するとされる歩行法のことである³¹⁾。そうすると、本節の大意は次のようになる。

杯の米を持って池へ行き、東に向かって、禹歩を三步し、米を（池に）投げて、呪文を唱えて言うには、「ああ！曲池（の神）に告げよう。某々の腫癰は破れ。禹歩して、よい穀物を撒いたので、某々の腫癰を速やかに去らせよ」と³²⁾。

王貴元氏の見解では、曲池に癰の治療を願うのは癰に膿血を含むことが湾曲の水池と同じ特徴があると考えられている。「癰」の意味について、『説文解字』に「腫るるなり。疒に従ひ、誰の声」とし、また『太平御覧』に『積名』を引用して「癰は壅がるなり。氣壅がりて不通なり」と言っている。このように、癰は気が塞がって通じない原因で形成された腫れ物のことである³³⁾。『黄帝内経・靈枢経』癰疽篇は、次のように「癰」の形成原理を説明している。

夫血脈營衛、周流不休、上應星宿、下應經數。寒邪客於經絡之中、則血泣（澀）、血泣（澀）則不通、不通則衛氣歸之、不得復返、故痲（癰）腫。（夫れ血脈營衛は周流して休まず、上は星宿に応じ、下は經數に応ず。寒邪は經絡の中に客まれば、則ち血澀る。血澀れば則ち通ぜず。通ぜざれば則ち衛氣これに歸し、復た返るを得ず。故に癰腫る。）³⁴⁾

「營衛」とは脈の中をめぐる營氣と脈の外をめぐる衛氣のことである。衛氣と營氣はともに人の体内を絶えず循環し、衛氣は邪氣を防衛する機能を持ち、營氣は營養の機能を持つとされている。本節の内容では、癰の病気にかかるメカニズムは寒邪の気が体内の經絡にとどまり衛氣の循環が閉塞されている状態から始まるといえよう。加納喜光氏がかつて中国の古代医学と水利工学との関係について、「秦漢代の思想に見られるように、水の停滞が腐敗を招くゆえに決潰せねばならぬとする考え、また水の氾濫を防ぐため正しく調節すべきであり、適当な放水が肥沃

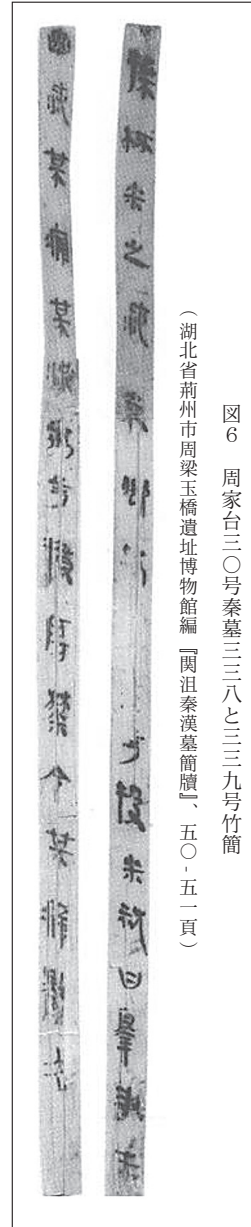


図6 周家台三〇号秦墓三三八と三三九号竹簡
（湖北省荊州市周梁玉橋遺址博物館編『閩沮秦漢墓簡牘』、五〇・五一頁）

28) 加納喜光『中国医学の誕生』第五章第二節「祝由」（東京大学出版会1987年、245～260頁）を参照。

29) 湖北省荊州市周梁玉橋遺址博物館編『閩沮秦漢墓簡牘』、積文131頁、図版50頁。

30) 王貴元「周家台秦墓簡牘積補正」、『考古』2009年2期、70～75頁。

31) 藤野岩友「禹歩考」（大東文化大学日本文化会編「日本文学研究（佐伯梅友先生古稀記念論集）」1969年、82～94頁）

を参照。

32) この訳文は、長谷部英一「周家台三〇号墓竹簡の治療法」（『中国哲学研究（18）』、2003年、40頁）を参照した。

33) 李昉編纂『太平御覧』、河北教育出版社1984年、784頁。

34) 龍伯堅編著『黄帝内経集解』、天津科学技術出版社2004年、2084頁。この読み下しは、加納喜光氏前掲書138頁を参照した。

と豊饒をもたらすとする考え、このような水利工学的思想が、体内の気と血の停滞が病気であり、それらの流通が健康であるとする病気観を醸成したのである」と言い、水利工学的思想は中国古代で病気観に転用されたと指摘している³⁵⁾。曲池の水が腐らないように、いつもそこの水を流動させなければならない。そうすると、水を流して曲池の腐敗を防止するのと同じように、体内に閉塞された気を開通して癰の治療を行なうことができると考えられたのであろう。曲池に癰を治す性格を持つのはまさに古代医学と水利工学の親密な関わりによるものではなかろうか。

三 『作庭記』における造園禁忌との比較

『作庭記』が平安時代の後期の成立とされる東アジア最古の造園専門書である。この書には仏教思想の影響が色濃く見えるが、平安時代に隆盛した陰陽道思想により著しく影響されていることも否定できない。たとえば、その造園禁忌説・祥瑞説及びこれと関連する四神相応説・相克相生説等はまさに陰陽道と密接な関係があると思われる³⁶⁾。もとより平安時代の陰陽道が中国から将来された天文学・占術学・暦学等の書籍のもとに成立したことは、先行研究ですでに指摘されている³⁷⁾。劉楽賢氏は、「日本の陰陽道文献の内容は確かに中国の古代の数術文献の内容と近く、両者は互いに符合する」と述べている³⁸⁾。ここでは、『作庭記』に見える池や遣り水の造園禁忌と秦代の「数術」簡牘における禁忌思想とを比較してみたい。

『作庭記』「樹事」に登場する「四神相足」説の中で「南前に池あるを朱雀とす」とあり³⁹⁾、四神相応の条件を得れば、官位福祿がそなわり、無病長寿であるとしている。この記載は睡虎地『日書』相宅篇の「池を西南に為らば、富なり」と基本的に相似している。もっとも平安貴族の苑池が比較的広く、反橋や平橋等が架けられることにより池を庭の正南に置くことに変化しているが。

『作庭記』「遣水事」は水の流れる方角とその吉凶について、次のように記す。

先水の水上の方角を定むべし。経云、東より南へむかへて西へ流すを順流とす。西より東へ流すを逆流とす。しかれば東より西へ流す常事也。又東方より出して、舎屋のしたを通して、未申方へ出す最吉也。青竜の水をもちて、諸々の悪気を白虎の道へ洗ひ出す故なり。その家の主疫気悪瘡の病なくして、心身安楽、寿命長遠なるべしといへり。

ここに引いた「経」について、田村剛氏は「宅経のことであろう」と述べ、すなわち中国古代伝来の相宅の要諦をまとめた『黄帝宅経』のことであるとしている⁴⁰⁾。この節で、水流は東→南→西へ流すことを順流とする上に、東から建物の下を通して未申（西南）の方向へ流すことを最吉としている。この記述は睡虎地『日書』相宅篇の「水瀆を南に出せば、家に利あり」及び敦煌文献 P3865 『宅経』の「宅中に水瀆東南へ流ること」と少し相違が見えるが、その類似性は否めない。本節ではまた青竜（東）の水を白虎（西）へ流せば、諸々の悪気を洗い出すことができ、その家の主人は疫気や悪瘡の病にかからなく、心身が安楽で、寿命が長遠であると述べている。この記述には周家台秦簡「病方及其他」における「曲池」に腫癰の治療を禱る祝由術の影響がうかがえる。『黄帝内経』にいつも「瘡瘍癰疽」を連語として取り上げるので、「瘡」と「癰」とはともに気の不通によって引き起こされた

35) 注(27) 前掲書加納喜光『中国医学の誕生』、136頁。

36) 田村剛『作庭記』、相模書房1964年、300～318頁。

37) 中村璋八『日本陰陽道書の研究』、汲古書院1985年、10～12頁。

38) 劉楽賢著、森和訳「出土数術文献と日本の陰陽道文献」、

早稲田大学長江流域文化研究所『長江流域文化研究所年報(4)』2006年、251頁。

39) 本稿に引用する『作庭記』の文は田村剛『作庭記』(相模書房1964)の校正文を用いた。

40) 注(34) 前掲書、田村剛『作庭記』、230頁。

病気であろう。したがって、流水が悪気を洗い出すことで、「瘡」の病気にかからない発想は「曲池」に腫癰の治療ができるという考え方と軌を一にするものである。

おわりに

本稿では、秦代の「数術」簡牘における苑池資料を検討することによって秦代私邸園池の地割から池の性格まで考察した。また、『作庭記』に見える池や遣り水の造園禁忌との比較を行なった。その分析や比較によって判明したことをまとめれば、次のとおりである。まず、睡虎地秦簡『日書』相宅篇等に基づき、秦代地方下級官僚の私邸園池を図5のように復元することができた。次に周家台秦簡に見える曲池が気の不通により引き起こされた癰を治す性格を持つのは、池の水を腐敗させないようにいつも流水をめぐらすという水利工学的な発想によっていることを明らかにした。最後に『作庭記』に記載する池の位置や遣り水の方角が、睡虎地秦簡『日書』相宅篇に見えるものと基本的に類似性を持つこと、水流で悪気を洗い出すことにより家の主人が疫気悪瘡にかからないのは周家台秦簡「病方及其他」における「曲池」の性格と共通性があることなど、の諸点を明らかにした。

〔謝辞〕 本稿を修正するにあたって、岩手大学平泉文化研究センター藪敏裕氏・伊藤博幸氏には、様々のご助言を頂きました。ここに感謝申し上げます。